

南沙艦隊殲滅 上

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～20頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶（次ページ）をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

挿
画
安
田
忠
幸

目次

プロローグ	9
第一章 南シナ海パトロール	18
第二章 フライイング・ダッチマン	37
第三章 検証使節団	65
第四章 スコールの中から	94
第五章 コナンドラム	121
第六章 第二作戦	147
第七章 パグアサ島	173
第八章 THING	200

登場人物紹介

日本

《防衛省》

〈特殊部隊サイレント・コア〉

ど もんこうへい
土門康平 二佐。傍若無人の上司、同期と離れたつもりだったが、相変わらずの日々を送ることに。コードネーム：モンブラン。

原田小隊

はらだ たくみ
原田拓海 一尉。元は小牧基地の教育隊所属の救難教育隊救難指導員。土門に一本釣りされ小隊長に任命される。コードネーム：K2。

はたけともゆき
畑 友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだ はるお
待田晴郎 二曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

みずの ともお
水野智雄 二曹。元水泳の強化選手。分隊長に出世した。コードネーム：フィッシュ。

たぐしん た
田口苾太 三曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひ がひろみ
比嘉博実 士長。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 士長。山登りが人生だという男。コードネーム：アイガー。

姜小隊

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目を付けられ、日本人と結婚したことで、部隊に引っ張られる。コードネーム：マカルー。

うるしげらたけとみ
漆原武富 曹長。姜小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 二曹。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

み どうそう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

い い かける
井伊翔 二曹。姜小隊のITエンジニア。コードネーム：リベット。

かわにしまさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

あねこうじ きねあつ
姉小路実篤 三曹。父親はロシアビジネス界の大物。コードネーム：

ボーンズ。

ゆ ら しん じ
由良慎司 三曹。西方普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：
ニードル。

あかばねたく ま
赤羽拓真 士長。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネー
ム：シェフ。

お だ ぎりしやう
小田桐将 一士。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あ び る あきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：
ダック。

《防衛省》

し みずりやう
志水亮 一佐。分析課長。

いまいずみまい か
今泉舞華 三佐。志水の部下。

〈在マニラ防衛駐在〉

と ま り のぼる
渡真利昇 二佐。在マニラ防衛駐在武官。パラワン島のジャングル
で、五年前に消えた飛行機を発見、確認した。

〈大学所属〉

ら もんまさむね
羅門正宗 准教授。サイコップの日本側代表者。専門は、リモートセ
ンシング。

中国

〈中南海〉

トゥアンリシイン
段立新 弁公室長。

イェン ア ビン
嚴亜平 少将。海軍情報分析部。

〈駐日中国大使館〉

チンヨンコ
金永革 中国大使。

〈マニラ中国大使館〉

ツァイ イ
蔡一 中佐。中国大使館付き武官。普段は陽気な男。

アメリカ

〈CIA〉

レネー・フォイルナー 物理学者。専門は量子力学。CIAにおける、
サイコップの責任者。

南沙艦隊殲滅

上

プローグ

海上自衛隊在マニラ防衛駐在武官の渡真利昇^{とまりのぼる}二佐は、SH-60K哨戒ヘリのキャビン・シートに座り、バブル・ウインドウから眼下を見渡していた。

ひたすら、緑の世界が続いている。

凶悪な景色だと思った。このジャングルに囚わ^{とら}れたら、一生出てこれれそうにない。富士山^{ふじさん}の青木ヶ原樹海^{きがはらじゆかい}を、一〇〇倍凶悪にしたような風景が延々と続いているのだ。

乗員が右舷側の窓を示した。中腰になって窓の外を見ると、護衛艦が一隻浮かんでいる。

マニラから六〇〇キロ、帰りの燃料はもう無い。

ここで離着陸したら、護衛艦まで辿り着くのがやっとなだろう。

フィリピン陸軍のマリテス・サンチャゴ少佐が、コクピットの背後から「中佐、着きましたよ!」と叫ぶと、ヘリコプターがゆっくりと速度と高度を落とし、ホバリングに入った。

対地高度一〇〇メートルほどでまた水平飛行に移り、ゆっくりと南下しはじめる。

腰にモンキー・ケーブルを付けた渡真利も立ち上がると、パイロット越しに改めて外の景色を見た。

一週間前にフィリピンを襲った台風は、瞬間最

大風速八〇メートルに達する凄まじいものだった。ジャングルでも、あちこち木々がなぎ倒されている。

まるで、ゴジラが踏みつぶした後のようだ。

そんな中で一箇所だけ、とりわけ大きな被害が出ている所があった。

高い木はなく、せいぜい二〇メートル程度の高さの木しか生えていない場所だが、そこだけ、ぽっかりと穴が空いたようになっていた。

そしてその中心部に、巨大な旅客機が鎮座していた。

ペンキが剥げ、蔦が這っていたが、明らかに大型の機体だ。それも、ワイドボディの大型機。

ヘリは、ゆっくりとその上空で旋回する。

旅客機が損傷している様子は窺えない。奇妙なことに、周囲には倒木などが一本も見えず、まるで最初から拓けていた土地のようだった。そこに

旅客機が、つい数分前に、ふわりと着地したような印象だ。

周囲には高い木が繁っているが、それらも押し倒された形跡すらない。

いったい、どのようにここへと不時着したのだろうか、渡真利は首を傾げた。

サンチャゴ少佐が、ジャングルが切れた辺りを指差すと、そこには川が一本流れていた。

周囲に集落の類は無さそうだが、少なくとも着陸はできそうだ。ホイストで降りる覚悟をしていたが、そうせずに済みそうだ。

パイロットが、残燃料を気にしているようなので、渡真利はランディングゾーンに向かうよう要請した。

河原にはゾディアック・ボートが繋いである。ヘリ一機がホバリングして乗客を降ろすくらいの空間がある。



地上に降り、ヘリが遠ざかっていくのを見てみると、むっとする熱気と、ジャングル特有の強烈な臭いが鼻を突く。

麦わら帽子を被り、犬を連れた地元民が二人待っていた。サンチャゴ少佐がタガログ語で彼らと会話すると「さあ、行きましょう！」と渡真利を促した。

「ここから一キロちよつとです。すでに行程の半分ほどは藪を払ったそうですから、一時間くらいで辿り着けますよ」

「迷う心配はないのですか？」

「いやあ、中佐は衛星携帯をお持ちだし、私はウォーキートーキーを、地元民も犬を連れているし、その心配はないんじゃないですか」

「日没までに脱出しないと、ヘリで吊り上げられる羽目になる」

「まあ、それもいいでしょうな。世界が答えを待

っている。急ぎましょう」

地元民が、マチェットで下生えを払って進んでいく。森へ入ると、湿度が上がり、さらに不快指数が高くなった。

今度の台風では、フィリピン本土はもとより、海上でも大きな被害が出ていた。貨物船や漁船が多数沈没し、それらの搜索が今も続いている。

正直、こんなことでヘリを駆り出すのは忍びない。こちらの方は、生存者がいないことははっきりしているからだ。

何しろ、五年も前の行方不明事件だ。

しかし、少なくともこれで遺族の気持ちは整理が付くだろうし、何よりブラック・ボックスが回収されれば、事故原因もわかる。

日本は機体の発見に貢献できたことで、感謝もされるだろう。

自分の役割は、ただ機体ナンバーを確認するこ

とだけである。機内に入る必要はないから、無残な遺体を見ることがもない。

徒歩で九〇分かけて、ようやく墜落現場に辿り着いた。下生えが深く、機体を一周するのも難しそうだ。

渡真利はまずデジカメで機体の写真を撮ると、エアラインのマークと機体ナンバーをメモし、それも写真に収めた。

脚は出ていない様子だ。だが、機体には損傷した形跡もない。エンジンですら、一切損傷していないようには見えなかった。

もし脚を出さずに地上へ不時着したのなら、エンジンが脱落するなり、カウリングが歪むものだが、傷も歪みも確認できない。

キャビンは、全てシャッターが降りていた。コクピットの窓も陽光が反射して、中は見えない。

挙げ句、鳶もびっしり這っている。

住民の連れてきた仔犬が、機体に向かって激しく吠えはじめた。

「……中佐、確か、この機体が行方不明になったのは、夜でしたよね」

「ええ、そうです。離陸は夕方で、西陽が左翼側に真っ直ぐ当たっていたはずだから、夕食に入ると同時に、キャビン・クルーはシャッターを降ろさせたはずです。左右両側とも」

左翼側エンジンの周囲の下生えを払ってもらうと、機体を覗き込んでいた少佐が「……変だな」と漏らす。

「ほら、ここ。見てください。カウリング部分に、貝の殻が付着している。イガイの類ですね」

「イガイ？　ここは標高四〇〇メートル前後で、海からは何キロも内陸部に入っている。貝は貝でも、淡水性の貝じゃないですか？」

「詳しい分析は専門家に任せますが、私は海のイ

ガイだと思えますよ。しかもこれ、波打ち際にしか生息しない種類のはずだ」

主翼の後部に回ると、鳶が翼を跨いで機首側まで育っていた。いかにもここを登れ、と誘っているようだ。

渡真利は、飛行機の知識は世間並みしかなかったが、少なくともフラップや何かの補助翼を出した形跡はないことはわかる。つまり、不時着するような動作を行ったようには見えなかった。

振り返ると、垂直尾翼の三、四倍の高さはある。そうなほど、背後の木は育っている。

「……上から見た時もあったんだが、機体の周囲の木は、大型機が不時着した際になぎ倒したようなものは一切見当たらない。木だつて、たった五年間では、あれほど成長しないでしょう。何だかよくわからないなあ」

「中佐、主翼の上——あそこだけ一箇所シャッタ

ーが上がっている。ここから主翼に上がれるみたいですが、どうします?」

「……何が見えると思う?」

「そりゃ、まあ……あまり気持ちいい物が見えるとは、思いませんね」

少佐は言い淀んだ。そして地元民に何かを話しかける。すると相手はとんでもないという顔で「ノー! ノー!」と拒否をした。

きつと、覗いてこいとても命じたのだろう。

「まあ、ここまで来て、中を調べないというわけにもいかないでしょうね……」

渡真利は、なんで自分はこのことを引き受けたのだろうと後悔する。きつと今から見るものは、一生のトラウマになるはずだ。

ハッチには、どこにも開いた形跡はない。シューターが膨らんでもいなければ、半開きのハッチもなかった。

まさか、乗員乗客が脱出したシューターを片付けてハッチを閉めたとも思えないので、その窓の向こうに何があるかは、あまりにも明白だった。

渡真利は、デジカメを少佐に手渡し、蔓に手をかける。

「写真は撮らなくてもいいんですか？」

「ああ、それは止めておくよ。何というか、死者に失礼だろう。報告は口頭で十分だ。全員ミイラ化していた、とかね」

渡真利は主翼に上がると、足下に気を付けないが、そのたった一箇所、シャッターが降りていない窓に近付いた。

陽光が反射して、中は見えない。

もう少し近づき——全く気は進まなかったが、さらに顔をくつつけた上で、両手で外光を遮断する。

……思った通りの光景が広がっていた。

窓際に座っているのは、髪かみの毛が長いので、たぶんご婦人だろう。彼女のミイラ化した顔が、渡真利のすぐ二〇センチ向こうにあった。その隣は男性か。金歯が覗いている。

もう十分だろうと自分に言い聞かせ、顔を離そうとした瞬間、渡真利は仰のけ反ぞった。

背中を悪寒おかんが走り「ウッ！」と呻うめいて、背後へと屍餅しりもちを着く。絵に描いたような、腰が抜けた状態になってしまった。

「あ、あり得ない……!!」

「大丈夫ですか、中佐!!」

「あり得ない!!」と、渡真利は全力で否定した。

これは確か、シミュラクラ現象類像とか呼ばれるやつだろう。あの、三つの線や点があれば、何でも人間の顔や幽霊ゆうれいに見えるという、脳が起こす錯覚現象だろう。

「い、いや、なんでもない。私は、こう見えても

サムライですよ。たかがミイラを見て、腰を抜かしたりはしません！」

「そうですね。もちろん、滑^{すべ}っただけでしょうね」

少佐は冗談交じりだったが、渡真利は今にも心臓^{しんぞう}が飛び出しそうになっていた。

一刻も早く、この場から立ち去りたいという気持ちで一杯になっていたのだ。

仔犬が吠えていたのは、このただならぬ気配を察したからだったのか。

翼から降りて呼吸を整えたが、顔が青ざめているのが自分でもわかる。未だ全身の毛が逆立ち、鳥肌^{とりはだ}が立っていた。

「あの……本当に、大丈夫ですか？ だから私は登らなかつたんです。コクピットの方も、確認しますか？」

「いや、いいだろう。見えなかつたことにすれ

ばいい。とにかく、乗客は確認した。見えた範囲内では、全員がミイラ化している。後は、フィリピン政府からシンガポール当局に、行方不明旅客機の発見を弔意^{ちようい}とともに報^しせて、自分らは合衆国政府に報^しせます。たぶん、明日一番で、国家運輸安全委員会^{N T S B}の係官が飛んできて、ブラック・ボックスを回収していくでしょう。遺体の回収は、フィリピン国軍の仕事になるでしょうが……」

「遺体の回収やら何やらで、しっかりとした道路を作る必要がありますね。まずは、川縁にベース・キャンプを立ち上げないと」

「ええ、日本政府も可能な限りの協力はします。重機が必要なら、うちの大型ヘリで運ぶことになるでしょう。どの程度の協力ができるかは、外務省次第ですが。とにかく、引き揚げましょう。必要な情報は入手した」

「そうですね。日没前に、川縁まで戻らないと」
渡真利はここを去る前に、衛星携帯で大使館に
電話を入れた。

機体を発見したことで、当たり前ながら生存者
はいないという二点を報告する。それ以上のこと
は、一切言わなかった。

そして渡真利は、全員を急かすようにしてジャ
ングルを抜ける。まるで、あの飛行機が自分を追
いかけてくるような、冷たい殺気^{さつき}をずっと感じて
いた。

二度と、その機体を振り返りたくはない。

途中、何度も後ろを振り返りたい誘惑^{ゆうわく}に駆られ
たが、絶対に駄目だと自分に言い聞かせた。その
ジャングルを抜けるまで、仔犬はずっと吠え続け
ていた。

燃料を補給したSH-60K哨戒ヘリが戻ってく
る。

キャビンに乗り込むと、機長が「機体上空を旋
回して帰りますか？」と尋ねるので、渡真利は
「とんでもない！」と応じた。

「可能な限り、墜落機からは離れて飛んでくれ！
絶対に、近寄ってはならない!!」とまくし立てる。
その反応に機長は驚いたようだったが、結局、
川筋にそってスルー海へと抜けると、そのまま
マニラへと針路を取った。

洋上には、夕暮れが迫っていた。

サンチャゴ少佐が「綺麗な夕陽^{きれい}を拝^{おが}めますよ」
と声をかけてきたが、渡真利はここにきても決し
て外を見ようとはしなかった。

窓に、何かがへばりついているような恐怖を拭^{ぬぐ}
いきれなかったからだ。

何もかもが、あり得ない出来事だった――。

第一章 南シナ海パトロール

防衛省・分析課長の志水^{しみずりょう}亮一佐は、資料を抱^{かか}える部下の今泉^{いまいずみ}舞華^{まいか}三佐を従^{したが}え、中央指揮所へのエレベータへと急いでいた。

歩きながら「間違いないだろうね？」と彼女に念押しをする。

「ええ。もし何もなければ、私が課長から大目玉を喰らい、課長は空騒ぎしたことで、少しでもバツの悪い思いをするだけです。しかし、何かあれば、南シナ海に出した二隻がやっかい事に巻き込まれることになります」

「それはそれで困るが……やっところまで、日中関係が持ち直したんだ。そんなことがあるとは思

えないが……」

中央指揮所隣の会議室に入ると、お歴々^{れきれき}はすでに席についていた。

志水が「遅くなりました」と詫^わびてから、正面スクリーンの前に立つ。

「昨日、東海艦隊に若干の動きがあったことは、今朝の日報でお伝えしたとおりです。本日、今度は南海艦隊での動きをキャッチしましたので、それに関して報告いたします。まず、こちらをご覧ください——」

正面スクリーンに、円環^{えんかん}状の島を真上から撮影したカラー写真が映し出された。

「これは、うちの情報収集衛星が撮影した写真で、撮影時期は一〇日前です。場所はミスチーフ礁^{しゅう}。一九九五年に中国がフィリピンから奪った環礁で、ファイアリー・クロス礁、スビ礁に続き、最近三本目の滑走路^{かっそうろ}が建設された場所です。そして、これが今朝撮影した映像です」

スライドを切り替えると「おお!」と、どよめきが起こった。

「ご覧のように、滑走路、兵舎、レーダー施設、ヘリポート、棧橋。全てが痕跡^{あと}無く、消え失せています」

「台風ですか?」

海上幕僚長の玉城宗生^{たまきむねお}海将が聞いた。

「はい。今現在、もつとも合理的に説明できる理由を探したら、台風だと考えます」

「まあ、埋め立てにしても、施設建築にしても、呆れるほどの突貫工事^{とつかん}だったからな。現場付近は、

七、八メートルの波が一日二日荒れ狂っていた。高潮^{たかしお}で施設が流され、更地^{さらち}に戻ったとしても、不思議はない」

「気象班の分析も得ましたが、そういう理由で間違いないだろうとのことです。ただし、なぜか中国はそうは考えていないようで、フィリピン側へ嚴重な抗議と謝罪を求めている模様です」

「いや、どう見ても自然現象だろう。だいたいフィリピン軍の装備では、藁葺^{わらぶ}き小屋を吹き飛ばすのが精一杯だ」

「台風が通過する間は、そもそも船舶^{せんぱく}の航行すら不可能で、もちろんフィリピン軍に爆撃能力はなく、普通に考えればそんなことはあり得ないと思うのですが。一つの可能性としては、中国側がその惨事^{さんじ}をフィリピン政府の責任に帰し、次のステップに踏み込むことを考えている可能性も無視できません。例えば、フィリピン占領エリアの奪取

などです」

「アメリカは、なんと言っている？」

「向こうのカウンターパートとも話しましたが、状況はまだよくわからないが、中国側の怒りはどうも本気らしい、とのことでした」

「このくらいの規模の基地を完成させたとなつては、基地機能の維持に当たっている兵士は二〇〇名を越える。それが、全員いなくなつた——最悪、全員死んでいるかもしれないというのは、基地の性格からいえば、自然現象のせいだとはなかなか受け入れ難いだろうな。……うちは今、二隻を出しているんだよね？」

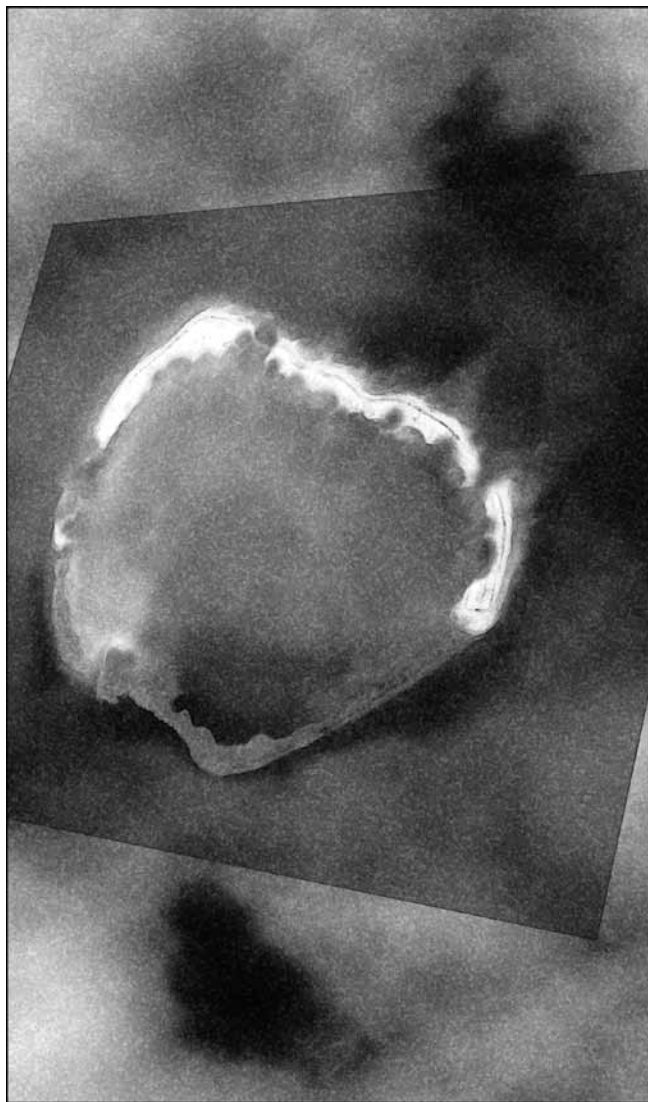
「はい。台風が通過した直後より、遭難漁船の捜索に当たつております。パラワン島の近くです。疑われるようなコースには、いませんでした。台風通過時は、沖縄沖へと退避していましたので。そのことは、中国軍も把握済みのはずです。ただ

し、捜索海域はミスチーフ礁にも近いので、中国側が主張する領海一二海里ラインには接近しないよう、以前から命令してあります。それと、例のパラワン島で発見された、行方不明旅客機の遺体回収支援で、いずもを中核とする艦隊が発発しています」

「早いね、それ。普通なら出航準備に、一週間はかかるだろうに」

「フィリピン軍との協力海上即応訓練が予定されていたお陰です。台風がフィリピンに上陸する前に、災害派遣要請があることを予測して準備していたようです」

「うちとしては、巻き込まれることをまず回避しなければならぬ。もし中国が本気で何かを仕掛けるつもりなら、アメリカ側次第ということになるが、今の米中関係では、中国が何かを仕掛けるからといって、それを止めるだけの力は、アメリ



カにはもう無いだろう」

「些細なことなのですが……」

と、ここで今泉が声を発すると、志水は気乗りしない顔をして部下を一瞥した。

「遠慮はいらん。聞こう」

これまで黙ってパソコンを操作していた今泉が、軽く一礼してから口を開く。

「一点、奇妙な事実があります。今回の台風は影響範囲も広く、中国が同時期に南沙に建設した施設の全てが被害を受けました。どこの施設も、大なり小なり損傷を受けています。滑走路が水没したところもあれば、レーダードームが吹き飛んだところも。ただ、いずれも共通して言えることは、損害は被ったものの、施設自体が更地に戻るほどの影響が出たのは、このミスター礁ただ一箇所だということです。気象班にミスター礁だけが大量被害を受けるような状況だったのか、確

認を取ったところ、この台風の勢力、針路から見ても、そのような判断はできないという分析が出ました。この破壊は、不自然なものなのです」

「なるほど。だが、最初に戻るが、フィリピン軍にそれは無理だし、たとえば、ベトナム空軍が荒天を突いて戦闘機を飛ばして爆撃したかもしれないが、なら中国はベトナムを責めるだろう。もちろん、ベトナムが自国に近い場所ならともかく、あんな場所を選んでわざわざ攻撃するとも思えないが」

「はい、現状では仰る通りです。この破壊は自然ではありますが、それでも合理的解釈をするならば、台風による破壊であると言えませんか」

「他の可能性もあるだろう」

今まで黙って聞いていた、背広組である防衛局長の瀬野清道が口を開く。

「たとえば、中国を挑発^{ちようはつ}したい誰かが、台風に乗じて巡航ミサイルを数十発ぶつ放した、とか」

「米海軍がですか？ それは、技術はありますし、海軍が今のホワイトハウスの対中融和^{ゆうわ}姿勢を忌み嫌^{きら}っていることも事実ですが、そこまでのことはやらんでしよう。兵士の口に戸は立てられない。いつかは漏れて、大スキャンダルになる」

「まあ、そうだろうね。実は、フィリピン政府から、非公式な救援要請が届いている。彼らはもちろん、そのミスチーフ礁の事態に関して無実だし。亡くなったと思われる兵士たちには哀悼^{あいとう}の意を表するが、どうにも中国には話が通じない。それについては日本が間に立つなり、艦隊を派遣するなりして助けてくれないか、と」

「無茶を言わんでください。日本に何の利害もない南沙の問題で、中国と事を構えろと仰るのですか？ それは、外交レベルで治めてもらうしかな

い」

「私もそれが本筋だと思うが、米側からは、いい機会だから、どこまでやれるか試して見るのもありだろうという提案を受けている」

「……その米側というのは、誰ですか？ 第七艦隊レベルの話でしたら、国務省やホワイトハウスの許可なんて、絶対に受けていない話ですよ。日本が国家として、おいそれと乗れる話ではありません」

「もちろん、わかっている。だが中国も、まさか本気でフィリピンがやったと思っているはずもない。だとすれば、これは中国側に計略ありということ、見過ごすわけにもいかんでしよう。南沙を巡る問題は、存立危機事態だと言ってしまったことでもあるし」

「……あんな、いらんことを言うから」
と海幕長は舌打ちをした。

「第七艦隊が空母機動部隊を出すというなら、お供をしましょう。そうでないなら、われわれにその意志はないことを、はっきりアメリカ側へと伝えてください」

「まあ、ちょっと検討してください。これは官邸の意向だと受け取ってもらってもいい。何も艦隊同士で睨み合って、即ホット・ウォーになるわけでもないし。災害派遣や、行方不明の船舶の捜索活動ということで、表向きの理由は立つでしょう」

海幕長が「どうかしている」とぼやきながら首を横に振った。

それは拒否するという意味ではなく、単に気乗りがしないという意味表示だ。

「では、そういうことで」

ブリーフィングが終わり、皆が退出していく。部屋の片付けをしている今泉へ、志水は「ちょ

っと待ってくれ」と呼びかける。

「客が来る。外部の人間だ」

「外部の？　こんな、機密エリアにですか？」

「ああ、問題はない。彼は、うちの情報衛星の開発にも協力してもらっている。とある大学の、情報技術センターの准教授だ。君はたしか、サイコップの担当だったよね？」

「え？　《超常現象の科学的調査のための委員会》のことですか？　日本側担当者の氏名をエントリーするだけで、何も仕事することはないと聞いてましたけど」

「五年前、例のシンガポール航空機が行方不明になった時、実は僕がサイコップの日本側担当者だったんだ。本来はもっと若手が担当するはずだったけど、確かあの時は、担当者が胃癌^{いがん}か何かの治療のため、長期入院してしまってた。どうせ仕事はないのだから、軽い気持ちで引き受けたんだが

……」

志水は、スクリーン前の肘掛け椅子に腰を下ろす。

「そうなんです。でも、シンガポールの件はよかったじゃないですか！ 機体が見つかったんですよ。ニユースでは、ブラック・ボックスも無事回収されたと言っていました。それで、何かサイコップ絡みの動きがあったんですか？」

「ああ。……外務省から、発見当時の機密報告書が届いているから、後で目を通しておいてくれ。

発見されたきっかけは、これからここに来る准教授の研究だったらしい。それと……これからする話は、君の胸の内にしまつて、いかなるメモの類も残さないと約束してほしい。准教授に話す必要もない。というか、話しては駄目だ」

「はい」

今泉も、手を休めてテーブルに座る。

「見つけたとされる航空機だが、トラスポンダが切れ、エーカーズが切れ、最後にピンが残った。それが最後に受信された位置が公表されただろう。巨大な円弧だ。とても搜索なんてできやしない。ところがこの話には、ミステリーがあつてね。トランスポンダが、その後何度か受信されたんだ。最初は一ヶ月後、次が三ヶ月後、そして五ヶ月後。いずれも素数^{そすう}。ほんの一瞬だけ、トランスポンダが入って切れるを繰り返した。状況があまりに異常だったので、これはサイコップの案件だということになり、各国間で協議がもたれた。日本としては、できることはほとんどなかったが、あの時の結論としては、誰かの悪質な悪戯^{いたづら}だろうということに落ち着いた。それ以外に、解釈のしようがなかったからな。トランスポンダの発信位置はいずれも南沙海域で、上海^{シャンハイ}行きの同便のコースからは大きく外れていた。最後に確認されたのは、

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF
形式で、作成されています。この続きは
書店にてお求めの上、お楽しみください。